

大学「改革」あれこれ（3）

人文社会学部には人間科学科、現代社会学科、国際文化学科の3学科がある。「新しい知の創出をめざして」、それぞれの学科が競い合って特色をもった教育を推進してきた。「改革」という名による2学科への再編のターゲットは、どうも現代社会学科のようだ。



現代社会学科の人材養成目的は、「現代社会の諸問題を的確に認識し、複数の学問分野の知見に基づいて、自らその解決方法を考察することのできる人材」「専門的な社会調査能力、社会分析力をもって、現実社会のさまざまな利害関係を分析、調整できる能力を持つ人材」にある。

こうした人材を育成するために、社会学をはじめとした社会諸科学の基礎的な素養を学際的に学ぶこと、現代社会が抱える諸問題に直接アプローチする力を身につけることを重視している。後者については、2年次に開講している社会調査実習が「看板講義」としてあげられよう。学生が選択したテーマに対して、1年近くかけて調査をして報告書として刊行するハードな実習である。会議室には、年度とテーマごとにダンボールに整理された調査報告書が並んでいる。地元商店街で報告会なども開催され、地域社会にも一定のインパクトを与えている。近年は名大などと「インターカレッジ報告会」を開催して、大学間連携が拡大してきた。



現代社会学科にふさわしい人材も、だんだんと育ち名古屋市などの自治体や地元企業、マスコミなどで活躍している。現代社会学科は実績と評価をあげつつあるが、学科再編＝リストラの標的にされてきている。これでよいのか。もう1つの「看板講義」である問題認識特別講義を長年担当している山田雅雄・名古屋市副市長は、最新の学部案内に次のようなコメントを寄せている。「これからのまちづくりに求められる能力は調整です。それにもっとも応えられる学問は、都市計画でも土木でも法律でもなく社会学であると思います」



（2008年9月29日 記）